



学校だより 7月号

令和8年6月30日発行

ふるさとに学び ふるさとで遊び ふるさとを愛する子 ～ふれあいがやき豊かな心～

一緒に試行錯誤するパートナー 最後に決めるのは自分

校長 藁科 直希



先日、昇降口にあったツバメの巣から、ツバメたちが無事に巣立っていきました。ツバメは天敵を避けるため、人通りが多く明るく安全な場所を選んで巣をつくるといわれています。また、害虫を食べてくれる益鳥であり、毎年同じ場所に戻ってくることから、ツバメが巣をつくる場所は「環境がよく、守られている、居心地がよい、福や豊かさを呼ぶ」など、大変縁起がよいとされています。子どもたちが毎日生活する学校が、これからも安心できる居心地のよい場所であり続けられるよう、教職員一同、力を尽くしてまいります。

さて、6月9日には、文部科学省学校 DX 戦略アドバイザーであり、AI リテラシーの第一人者である札幌国際大学の安井政樹先生をお招きし、3年生と5年生を対象とした生成 AI リテラシーの授業を行っていただきました。

安井先生は冒頭、「包丁は、使う人の使い次第で、人を幸せにも不幸にもするものであり、AI も同じである。道具そのものが危険なのではなく、適切な使い方を知らないことが危険なのだ」とお話しされました。

また、安井先生の「宿題の答えを教えてくれる AI と、答えを教えてくれないお家の方とでは、どちらが優しいか」という質問に対し、子どもたちからは「AI に頼ってばかりいたら自分で考えなくなって将来困るから、自分たちのことを考えてくれる家の人の方が優しい」といった、本質を突いた意見が出されました。

さらに、生成 AI の年齢制限についても分かりやすいお話がありました。「廊下は歩く」という約束があってもつい破ってしまうように、子どもはまだ適切な判断をして行動する力が未熟です。「お家の方の端末を借りて、自分だけで AI を使ったことがある」という児童がたくさんいましたが、安井先生は「それは、お家の方の車を借りて子どもが運転するのと同じで、やってはいけないこと」と説明され、子どもたちも深く納得していました。

この授業を受け、翌日からは他学年でも発達段階に応じた AI リテラシーの授業を展開しています。実際に「自分のアイデアをよりよくするための助言をもらう」「文章の推敲をする」「考えたことをイラスト化して友達に説明する」といった活動などに活用しています。安易に答えを求めるのではなく、自分の考えを広げ、深めるために「学びのため」「自分のため」「社会のため」になる使い方を意識させています。ぜひご家庭でも、AI とのよりよい付き合い方について、お子さんと一緒に話し合ってみてください。

安井先生が来校した日の放課後には、教職員向けの研修も行われました。その際、安井先生から「AI にプロポーズの言葉を考えてもらうのは、よいか、よくないか」という問いかけがあり、教職員の意見は二つに割れました。皆さんはどう思われるでしょうか。

安井先生は、生成 AI をうまく活用することで、大学の授業を休校にせず、全国で年間150回以上研修や講演を行い、充実した日々を送っていることを自らの姿で示してくださいました。道具の便利さと「人間の心」のあり方について、私たち大人も深く考えさせられる有意義な一日となりました。

